

# 時評

## 兵隊の位

### 岡本清一

は九十年ということになります。もちろん国家が年をとっていても、これまた人間と同じで、修養の足りない国家の場合には、思慮分別が乏しかったり、墮落したりいたします。どうして人間でもない国家に、人間のそれと類似のことが現象するか、これはまことに興味ぶかい問題であります。しかし難しい問題であります。

私にとってこの二十年近くの間、脳裡から去らなかつた問題は、イギリスはどうしてあのダンケルクの総退却をやり得たかという問題でありました。むろん戦術的なことは聞いていましたが、それが国民的支持のうちに Rowe、さらにこの総退却が戦勝への国民的自信の源泉となつたいきさつは、イギリスをみるまで深く了解することができませんでした。私がイギリス人をその国でみまして、第一に感心しましたことは、若い者にいたるまで、節度正しく、そしておとなしいということでありました。私は世界中でもっとも気性が激しく、したがって粗野な民族は、アラビア人と日本人とをしてお

学校もまたそうですが、国家のよな組織体は、一人の人間と同じように、生涯と成長と死亡のときをもっています。ですから若い国家は年齢を重ねた国家に比べますと、やはり何ということなしに、若さを感じさせるものがあります。国家の年齢を数えてみますと、イギリスは約五百年、フランスは四百年、アメリカは二百年、日本

隣の朝鮮人ではないかと思つていますが、これらの民族に比べますと、イギリス人は無気力かと思えるほどのおとなしさであります。人をどなりつけたり喧嘩をしたりするような者は、その社会から閉め出されてしまうようであります。幾人かの日本人はこんな気力のないことでは、イギリスの将来も大したものではないと申しました。私もそうだろうか、と思つてみたこともありました。しかしダンケルクの、史上最高といわれる総退却の成功と、その後のヒットラーにたいする執拗な抵抗につづくあの徹底した総攻撃とが、イギリス人の節度のあるおとなしさと共存する強さに由来していることを知りまして、私はついに兜をぬがざるを得ませんでした。そして個人でもそうですが、国家の場合にもすばらしい退却のできる国家は、大いへん偉いのだということを、改めて考えさせられたのであります。

このようなことから見ますと、豹のごとくつよく、退却すること知らなかつたアドルフ・ヒットラーは、やはり一軍の將たりうる人物ではなかつたようであります。彼の軍隊時代そのままに伍長の位が、ヒットラーには相当していたといえましょう。これにたいしてウインストン・チャーチル卿とソ連のシュコーフ元帥とは、何と云つても将器であります。退却の時を知つて、正しい退却を行なうことは、名将でなければできません。そのころの日本の総指揮者は、負けたからいふのではありませんが、ヒットラーを伍長たすれば、やはり下士官級であります。玉碎戦法のほかにこれといった戦い方を知らない下士官級の人間に、なぜ国家の経営を任せたのであるか、問題はそこにあるのであります。しかしそのころの日本人

やドイツ人は、けつきよくそれだけの国民でしかなかったのだと考  
えるほかありません。

過去のことはさておきまして、ついでにいまの政治家を「兵隊の  
位」で申しますと、キューバとの関係をますます悪化させるような  
ことばかりしているケネディ大統領の場合は、やはり将器である  
とは申せません。ケネディさんは青年カストロ首相とおつつかつの  
青年将校といったところですから、まず大尉にランクしておきま  
しよ。これに対するフルシチョフ首相も、たいていケネディ大尉を  
出ているとは思えません。ソ連はアメリカのように海外に軍事基地  
をつくらないということを、世界に何度も約束しておきながら、こ  
つそりキューバにミサイル基地を設け、そしてアメリカの威嚇をう  
けて、とりはらったあたりは、どうも大人らしくありません。これ  
をみるとフルシチョフさんは特進の少佐というところが似合いのよ  
うに思われます。今日の世界の不幸は、人類の生存か死滅かの運命  
を決する重大な鍵を、大尉の国と特進少佐の国とが握っているこ  
ろにあります。事実、この二人の国は、何をやらかすかわからない  
という不安が、われわれから去らないのであります。

このケネディ大尉と、船中会談のときに、膝が触れたといつて、  
たいへん光栄に感じた池田勇人首相にも「兵隊の位」をあたえると  
すれば、特進の中尉というあたりが、せいぜいのところですよ。わが  
首相の階級が低いのは、まことに遺憾であります。この戦後はと  
くに勝れた人材が、日本の政治家のうちに乏しくなったように思わ  
れてなりません。それは少くとも第一級とおぼしき人物が、政治家  
になりましたがないということにもよりましようが、何としても残念

なことであります。第一級の人物といえ、哲学者のパーランド  
・ラッセル卿は、政治家になろうか、哲学者になろうかと迷った末、  
哲学者を志しました。日本の第一級の人物は、何も迷わずに、政治  
家を志さないようでありませぬ。これは日本の政治家社会の、品位の  
低さによるのだらうと思ひます。イギリスのマクミラン首相は、オ  
クスフォード大学の総長を兼ねておりますが、かりに東京大学の総  
長選任の制度が、オクスフォード大学と同じであるとして、前総理  
大臣の岸信介さんは、南原繁さんやなくなった矢内原さんを排して、  
東大の総長に選ばれ得たでしようか。

私はマクミランさんはラジオやテレビを通じてしか知りませぬ  
が、その演説をききまして、これはやはり相当の人だと思ひまし  
た。とにかく彼が演壇に立つと、場内に暖い空気が流れるのであり  
ます。かつて私の知人が三宅雪嶺に、西郷南州はどういう人でした  
か、とききました。雪嶺は「南州は知りませんが、弟の従道はよく  
知っています。彼が、宴席へ現われると、万座春を生ず、といった  
人物でした」と答えました。中尉の国日本を、早く將軍の国にし  
たいものであります。しかしそのためには第一級の人物を政治家社  
会に送り得なければなりません。それは、けつきよく国民自身が偉  
らくなければできないことでもありますから、前途遠慮です。私ども  
は絶望しないで忍耐よく教育の事に精進するほかないと考へま  
す。

(法学部教授 政治史)

時評  
義談のせもに  
山田忠男

れるので、もともとは自ら蒔いた種の報いだと見られぬこともない。いや——それよりも、庶民にとってはにせもを見つければ四倍になるたのしみ位がせいせいのところ。犯罪はもちろん困るが、少くも私の生活においては、にせ札よりも交通地獄の方がはるかに恐ろしい。

善良なる人民にとって同様な例は、焼物の乾山である。乾山をケンザンと読み、そういう名の工人が昔の京都や関東で活躍したことを始めて知った人が増えた程度。それは、いわゆる文化財に対する国民的関心をわずかに高めたこと位が功績だろう。本物がどれだけかと血眼になっている当事者には失礼だが、まずは大衆の生活にとって風馬牛と聞いていい。

もっと哀れをとどめたのは、かのエーニンの壺である。これも永仁なる年号がかってあったことを啓蒙した功はあるが、何しろこの壺を焼いた本人がピンピンしてバリから帰ったりしては、鑑定した

千円札のにせも、横行が問題になつてから暫らくになる。もちろん、これは日本銀行——ひいては政府の信用にかかわることだから、当局がやつきになるのも無理はなからう。しかし、元来が所得倍増などという——その実はインフレ政策で、無暗に千円札の印刷発行に実績を上げるものだから、

何とか官というお役人や、何十万円——いや、何百万円で売買するのにお夢中だった連中など、目もあてられない始末。ついでながら、この件はいわゆるカンなどという怪しげなものに頼る一切の作業に対する不信を鮮やかに示した。

智能犯に手頃なタマとしてねらわれ、

こうしたにせもについての問題は、何も経済や芸術の場合だけに限らない。はなはだ残念なことだが、学問の場にすら見られるのである。かつての長岡博士の水銀還金にまつわる誤りは、電子を飛ばす技術よりも元来の材料における不純度から生じた不作為なエラーとして知られるが、戦時中の某大学病院に起つた結核菌培養による皇族誤診の事件は、単なるあやまちとして見逃せない多くの要素を含む。人類学においてもつとも著しい例は、学名をエオアントロプス・ダウソニで知られる、いわゆるビルトダウン人である。考古学マニアで知られた弁護士のドーソンが、砂礫層の中から頭蓋の破片と下顎骨を見つけたのは一九一一年のことであった。復元された頭部に比べて下顎の示す著しい原始性については、最初からいろいろな疑問が持たれてはいたが、やがてこれは第三紀末——すなわち百万年以上も前の人類としてランクされるようになった。学名の意味する「眺の人」はこのゆえんである。

しかし、その後の世界各地における化石遺骨の発見によって、人類の進化発展の跡が多少なりとも精しく辿れるようになるにしたがい、この「謎の人」の始末がどうにも収まらなくなった。第一、英国のビルトダウン界隈からは、これと関連づけられるようなものが何一つとして見当たらない。ジャバ、ペキンなどにおける直立猿人の調査が精細に進み、アフリカ大陸ではさらに人類最古の系統が発見

されるようになると、これらとも連絡がつかぬ。その上、直接の問題として頭蓋と下顎との関係がどうもおかしい。というわけで、再び「謎の人」を調査するグループが組織されたのは、第二次大戦後のことなのである。

さて、ここにもっとも威力を示したのが、最近の編年学における科学技術の進歩である。その精細をここに紹介しようとは思わないが、年代決定には放射性同位元素がはなはだ有力であることを特記しておく。というのは、自然科学の進歩のみが万事を解決するように思う立場を私はとらないが、物質の放射能もこのように使い方次第で極めて有効で、要するに科学技術といえども、使う人しだいで毒にも薬にもなるということには触れておきたかったのである。この点では、最新の物理学研究も、古の中国に伝わる柳下恵の水飴や儀狄の酒の故事となんら異ならない。

本題にかえるが、ここで明らかにになったのは問題のピルトダウン人がとんでもないにせものだったという事実。本物を掘り出しながら、長らく斯界の権威からにせもの視された例は、ジャバ猿人を始めとして日本にも随分ひどいのがあがるが、ピルトダウン人のような場合は自然科学では珍らしい。骨を古めかしく着色した跡も見つかり、その色素まで分った。かくして、学界に長らく波紋を起していた「謎の人」はわずかに五十年の生涯でその終りを告げ、今はただピルトダウン・ホークスなる言葉に名残りをとどめるしだいとなった。ただし、その犯人がだれであつたかだけは、もう今となって知るすべもない。

さて、ピルトダウンの幽霊まで御登場願つてにせものを論じた目

的は、未だに地上から姿を消さない——生きた人間のにせものについて申上げたからに他ならない。千円札もエーニンの霊も、それぞれに大なり小なり害毒を流すことだろう。しかし、それらの恐るべきことは、とても人間のにせものに比べればその足元にもよれない。ギリシャの昔、ディオゲネスが「人間集れノ」と叫んで一人デモを敢行したという伝説のゆえんもここにある。そして、人間のにせものを見破るには、さすがの放射能も最新科学の進歩も何の役にも立たない。

人間のにせものとは何か？これをほんものから区別すべき鑑定の基準は何か？それには恐らく各人各説があるだろう。そして、その各人各説を承るうちにも、あるいはその人の鑑定が出来るかも知れない。というのは、私は私なりに体得しているクライテリオンもあるのだ。ただし、それをここに主張して論陣を張ろうというのではない。ただ、世を毒し人を害すること人間のにせものにおよぶものなしということは、にせもの事件を見聞するたびに私が思うところ。そして他人のにせものを考えるよりも、まず何よりも自分がにせものにならないように心がけることが肝要ではなからうか。

大体が、今年という年は正月からにせもので騒いだ。すなわち、御歌会の盗作である。そしてその後には幾多のにせもの相續き、千円札事件がどうやらクライマックス。かくして秋も終りに近づき葉をすっかり落した木々の梢が「天の黙示」のごとく空にそびえる頃、私たちはイブを迎える。そして私たち同志社人は、新島先生の偉大さにあらためて思いをいたし、人間のほんもの尊さをしみじみと考えるべきであろう。

(工学部教授 人類学)